

鎌ヶ谷市市民活動紹介冊子

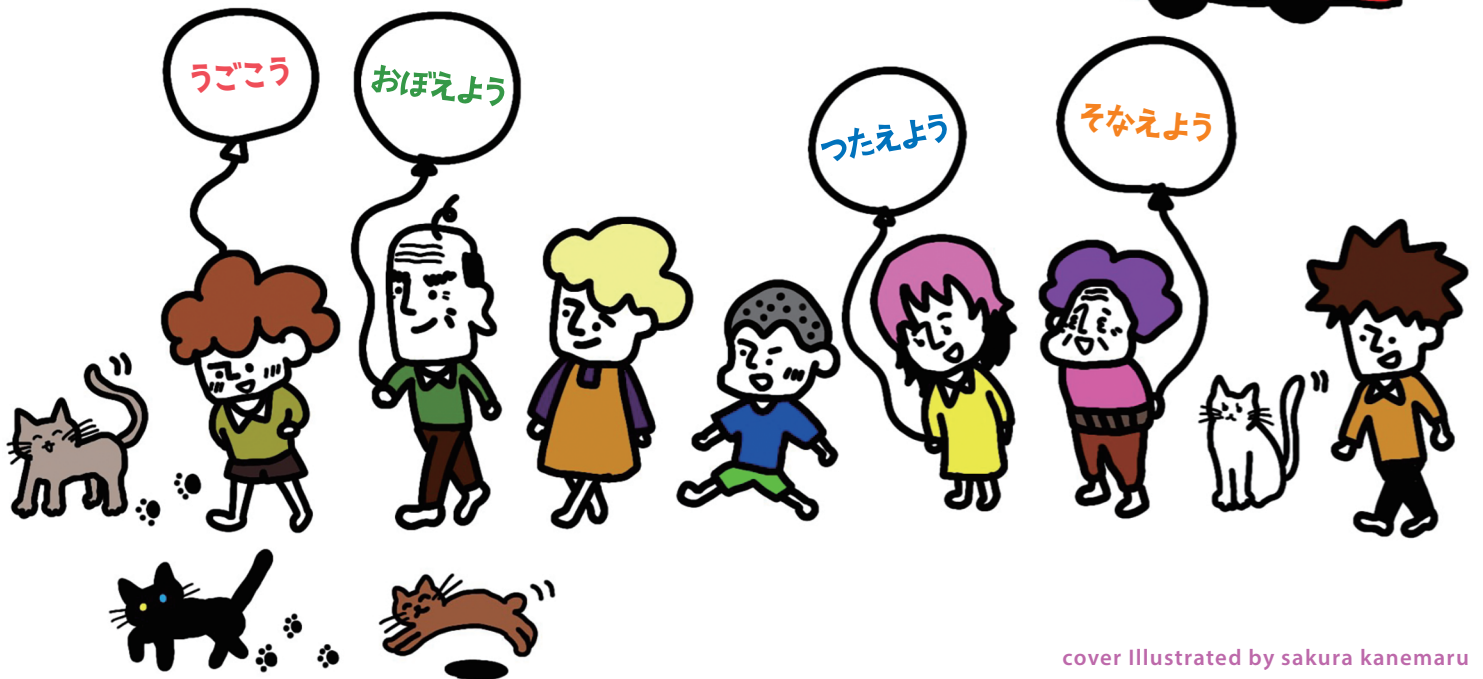
Gayya.

—がや—

Vol.5
2023



特集：鎌ヶ谷の地域防災



私たち鎌ヶ谷マネジメントラボは“誰でも居心地が良いと感じられる居場所が必要”だと考え、活躍する居場所のひとつである市民活動団体を紹介する冊子 Gaya を発行してきました。しかし、コロナウイルス感染拡大の影響により、2020年から様々な活動や行事が制限され、居場所がなくなり、人とのつながりも細くなってしまい、前号（Vol.4）では、活動団体や自治会の方々が、コロナ禍をどう乗り切ろうとしているのかを特集しました。

今号は、コロナ禍以前の脅威であったはずの巨大地震・台風被害・大雨、水害などが追い打ちをかけるように発生してしまったら、鎌ヶ谷はどうなるのか!? 市民の防災意識はどれくらいなのか? という視点で「鎌ヶ谷の地域防災」について、千葉商科大学の学生と一緒に取材しまとめました。本誌を読んで防災に興味をもていただけたら、また何か行動に移そうという気持ちになっていただけたらとてもうれしいです。



『Gaya. vol.4』



鎌ヶ谷市での活動の様子



防災かるたイベント

Gaya.

鎌ヶ谷市 市民活動紹介冊子
Gaya —がや— Vol.5

発行：2023年3月
発行元：
一般社団法人 鎌ヶ谷マネジメントラボ

1. 防災のリアルなリサーチ・クエスチョンを得る	3
2. 防災かるたができるまで	5
3. 消防本部を訪ね、防災対策の取り組みを学ぶ	7
4. 鎌ヶ谷市安全対策課に聞く 一市の防災対策と地域防災に向けた取り組み	9
5. 少年消防クラブの研修を見学 —防災クイズ	11
6. 市民の声を聞く	13
7. 防災かるたやってみた	15
編集後記	16
鎌ヶ谷マネジメントラボとは	18

Gaya Vol.5はコープみらい財団の「2021 暮らしと地域づくり助成」に採択され、制作しています。千葉商科大学・政策情報学部の「戸川ゼミナール」「吉羽ゼミナール」の学生と一緒に作成しました。今回の記事は、主に戸川ゼミの学生が、行政職員の方や市民の方にお話を伺い、原稿を担当しました。Vol.4に引き続き、吉羽ゼミの学生がデザインとデータ制作を行っています。

防災のリアルなリサーチ・クエスチョンを得る

暮らしに災害が少ないのは本当か？

地域防災を鎌ヶ谷市において考える上で、戸川ゼミナールでは春学期（2022年5月27日）に鎌ヶ谷マネジメントラボの甲斐氏および伊藤氏を招き、「防災を考える!!—災害が少ないと言われている鎌ヶ谷市!ほんとうなの?？」に関する講座をもとに、防災知識を勉強し、そこから本プロジェクトが始動しました。 (戸川ゼミナール 指導教員:戸川和成)

(1) 水などの水害問題には課題が多い

災害は地震だけではなく、鎌ヶ谷市ではとりわけ、地盤がきちんとしているという知識が市民に共有されている一方で、かつては平成25年台風26号が地域を襲い、馬込沢駅を通る電車運行を停止してしまうなど、市内のいたるところで冠水の問題が起きていることが共有されました。

2011年東日本大震災を経験して以降、未曾有の災害は地震だけでなく、水害によっても災害問題が起きることが予想されます。被害が大きくなれば冠水が社会インフラを止めてしまうという問題も考えられるため、暮らしを営む上では「災害の問題は地

震だけではなく」という意識づけが地域防災の観点から重要であるという知見が得られました。

自宅避難の重要性

災害は地震だけではなく! 昨今の異常気象で台風の被害の冠水や停電、崖崩れなど様々な被害に見舞われます。そのため、いざという時の備えと心構えで対応が変わります。行政や関係各所の皆さんと連携をとりつつ、自宅が被災を逃れた際は、**少なくとも7日間!**自宅で過ごせるよう備蓄を心がけていきましょう。



■で囲ってある地区で水害が発生した(鎌ヶ谷市水害実績図より)

(2) いざというとき、避難所では助け合い、自分の身を守りながら生活できるだろうか？

さて、「避難所では、一人2枚災害用毛布が配布されるようです。では、みなさんは避難先に災害用毛布を広げて、避難所で生活する人々が実際に何人寝られるかご存じでしょうか?!」と言われたら、読者の皆さんはどのように考えますか。それは災害が起きたら避けられないという、「避難可能人数」という問題です。

実は、このクエスチョンを投げかけられたとき、戸川ゼミナールの学生は解答できる者がおられませんでした。如何にしてリアルな災害を想定した上での防災行動が必要であることが、身につまされる思いで学ぶことができました。

読者の皆さんはご存じでしょうか。答えは、例えば、鎌ヶ谷市立五本松小学校体育館が避難先であ

れば、面積 886㎡。防災毛布は 2.66㎡ (1.4m × 1.9m) であるから、 $886 \div 2.66 = \text{約 } 333$ 人が毛布を配給し、避難生活が可能な人数になります。しかし、五本松小学校と、他2カ所の体育館が避難所として指定された担当地区人口には約 27,941 人(令和4年時点) おります。

驚くべき事実ですが、すなわち、いざというときに自分の身を守るため、とっさの判断で避難所へすぐ向かうとなれば、簡単に人は密集し、収容不可能なのは明らかです。実は、そうした地域防災をリアルに考える機会がまちには少ない。少しでも“ジブゴト”に考え、“タニンゴト”を減らす減災のしくみを地域に備えられるような、“自宅避難方法”をリアルに考える必要があることに気が付かされました。

防災をもとに地域のリ・デザインを一老若男女が居心地良い防災コミュニティを目指す

そこで、「暮らしの安心と信頼社会の構築」をゼミナールが目指すうえで、老若男女が、“リアルな防災知識の修得”を目指しつつ、防災をきっかけとして普段から顔を合わす機会の少ない人々が集まれるような居場所づくりを考えることに、本年度は注力いたしました。

とりわけ、鎌ヶ谷マネジメントラボが進める「防災かるたづくり」に研究協力し、子どもから大人まで一緒に楽しく防災を考えられるコミュニティをデザインする方法を防災かるたに組み込むことを考える研究活動を行いました。

地域住民の人々を対象とし、防災意識に関するお話を伺ったのは、そうした経緯に基づいています。

本雑誌を通じ、地域のみなさんが防災をきっかけに、井戸端会議をされるなど、居心地の良い自分たちのコミュニティが充実していただきますと幸いです。



戸川ゼミナール

みんなをまもるかるた ～話して・つながる・地域防災に向けて～ (戸川ゼミナール 指導教員：戸川和成)

防災かるたを通じて、日常から減災のまちづくりへと人々を紡ぎたい

いざという時、私たちは減災、復興に向け支え合い、共に生きていくことができるのでしょうか。同じ地域に過ごしながらも、普段会話することのなかった人々をどのように紡ぎ、会話する機会を創出し、少しでも減災に向けた豊かなコミュニティを地域に育むことができるでしょうか。私たちは、この問題を問いかけながら、「防災意識」や「防災対応」に対する地域社会の齟齬を減らそうと、助け合える社会に必要なかるたづくりに専念しました。

かるた制作の作業風景

～人々の声を聴いて、自らを問いかける～

鎌ヶ谷市が定期的に実施する市民意識調査を基に、「防災関連に関する意識」を分析したわけですが、それでも「防災意識って誰が高いのだろうか?」「自分はそんなに防災意識が高いわけではないので、同年代の人もあまり意識していないだろう。」「同じ地域に住む人の中でも考え方や生活のしかたに違いがあるから、どうしたら人々に納得される“かるた”が創れるだろうか。」、そんな疑問からスタートし、「では、人々に意識を尋ねながら、自分に問いかけ、必要な取り組みを考えよう」という研究活動がはじ



制作風景 (戸川ゼミ)

まり、防災かるた制作に必要な調査が開始されます。みなさんと共有したい知見を特集記事とし、身に付けてほしい知見を防災かるた1枚1枚に込める作業を行いました。

かるた製作のエッセンス

私たちは、あえて“五十音で遊ぶ”ことはせず、大事な取り組みを“キーワード”にし、シチュエーション(聞き取りから得た証言)を60文字へとコンパクトにし、“考えて遊ぶ(話し合って意見を共有する)”防災かるたを絵札・読み札セットで32枚作成いたしました。防災かるたを手にとる機会がありましたら、ぜひじっくりご覧ください。(戸川和成)



サポートしよう

こうれいしゃ
高齢者の
なか
そな
七日の備え

おひとりですと、お年寄りの方がま
ちには多く、近所の交流づくりと
びやく、ほうぼう
備蓄方法に困っていた時は、ぜひ
す 住まい近くの自治会で声かけを。



そなえよう

かるたデザインの依頼を受けて

(吉羽ゼミナール 指導教員：吉羽一之)

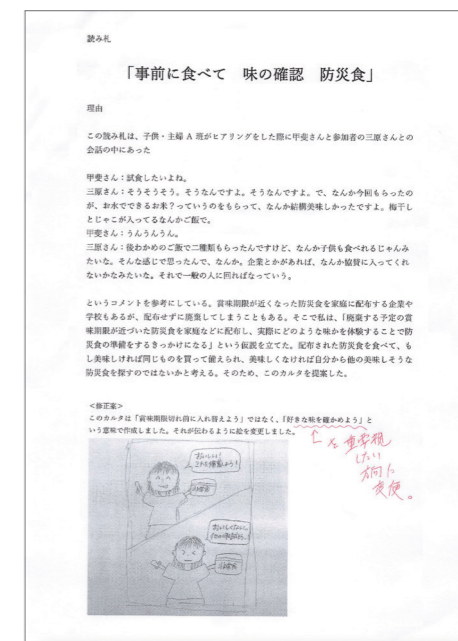
異分野のゼミナールの協働企画

千葉商科大学・政策情報学部は学部名の通り、政策情報学を学ぶ場です。政策情報学で最も重要なポイントは異分野同士がどうすれば、お互いの力を発揮できるか、そのつながり方を見つけ出すことです。今回の制作において、グラフィックデザインを専門とする私のゼミでは単に作るだけではなく、使う立場にも立って、より良いデザインを模索しました。

かるたデザインの過程

モノを作る際に学生同士をグループにすると、お互い気を使い合ってしまうと、公約数的なモノしか作れなくなる傾向にあるため、作業量的には厳しい印象もありましたが、この制作は学生二人で担当させることにしました。

二人には作業を単純に分担するのではなく、一人がディレクション、つまりイラストだけでなく、カードデザインなど、かるたデザイン全般の方向性を決める役を、もう一人がイラストレータ役を担当してもらいました。まずは二人で①のレポートを読み、そこに描かれている絵札のイラスト案を見て、ヒアリングの内容や提案からの作者が何を伝えたいのかを読み解きます。次に、ディレクション担当の学生がカードデザインに合わせてイラストの構図(②)を考えます。それを元にもう一人の学生がイラスト(③)を完成させます。完成したイラストをディレクション担当の学生が見て、他のイラストとの統一感などをふまえ、修正を出します。最終的に完成したイラストを使って、絵札を完成させます。イラストだけでは伝わりにくい部分にセリフを入れましたが、そこにストーリー性が生まれ、かるた遊びだけではなく楽しみ方ができるのではないかと思います。猫もちらほら、登場しています。いろんな楽しみ方で遊んでもらえればと思います。(吉羽一之)



①依頼内容をまとめたレポート (戸川ゼミ作成)



②イラストの構図検討案



③イラスト完成



かるた完成 (左：絵札、右：読み札)

3 消防本部を訪ね、防火対策の取り組みを学ぶ

2022年7月21日に、鎌ヶ谷市消防本部に赴き、戸川ゼミナールの活動に参加する柳澤氏および戸川氏、また鎌ヶ谷マネジメントラボの甲斐氏、伊藤氏の計4名で「防火活動と地域防災」に関するお話を消防職員の方に伺いました。本特集では主に「消防は防災ではなく、防火活動に専念致します」をテーマに、得られた知見を共有したいと思います。

実災害で迅速に活躍！防災というよりは主に「防火」の啓発

地域の自主防災は市役所が中心に管理する

自助・共助の担い手として、自主防災組織の日頃からの防災訓練や、防災に向けた取り組みは重要であると考えられますが、その取り組みの管理は実は市役所の管轄であり、消防署や消防団は「災害対応」や「防火に向けた取り組み」等を行っております。その違いを混同して理解してしまう方は多いのではないのでしょうか。

当初筆者も混同してしまっており、初めて耳にしたことでした。自主防災の訓練では消防団や消防署による「訓練の概要説明や、消火器の取り扱い、三角巾の取り扱い等の指導を実際に市民の方に行っており」実践のお願いをするなど防災に向けた連携主体の一組織として活動していることがわかりました。

防火に向けた、“消防団”がまちには欠かせない

防災政策にコミュニティが欠かせないことは明らかですが、いざという時の対応を共助によって可能にしなければならない一方で、コミュニティの稀薄化が減災文化の停滞に拍車をかけてしまうことも考えられます。

しかし、鎌ヶ谷市では当初想定していたよりも、「いざとなった時の連携に住民の力も借りていく」という文化があり、協力的な方が残っており、その象徴が消防団だということがわかりました。「消防団員は住民と言いつつも、非常勤の地方公務員です。“自らの地域は自らが守る”という精神に基づき活動をする自覚をもっていらっしゃいます」と説明されており、消防団によって、まちの防火は下支えされていることを改めて確認しました。



集合写真



防火に務めることを話す様子

コロナ禍を乗り越えまちの人々の協力を増やしたい

防火に向けて、「火災をいかに無くすか」という問題には「意識づくり」が住民に求められますが、その意識の有無が“消火”にはどのように影響し、延焼を未然に防ぐことにつながるのでしょうか。聞き取りによれば、次のことが考えられるようです。予防分野ですと、コミュニティが充実しておりますと、共助の部分でより初期消火の動きが変わってくるようです。さらに、「火は小さいうちであれば被害を防ぐ可能性が高いことから、「消火器の使い方を知ってる・消火器があることを知っている」という事が大切になるようです。

これは、「コミュニティが充実してないとなかなか周知できない」ことは消防士も強く認識しており、地道に声かけを続けていきたいという気持ちが聞き取り調査に強く表れていました。



3課同時にお話が聞ける貴重な体験です

知ってほしいこと、「消火器はレバーを握ってから約16秒」ぜひ、訓練にご参加を。

また防火指導の際に、「火を見ると意外と当たり前の行動ができないんだよ」という話がでるようです。だからこそ訓練は大切というお話をさせていただきます。そして皆さんは「消火器の噴射時間が約16秒しかない」ということをご存知でしたでしょうか。意外と短いと思いませんか？訓練の時にそういうお話もしてもらえるので、ぜひそうした役に立つ情報をキャッチしにいくためにも、地域の訓練に積極的に参加してはいかがでしょうか。



消火器の扱い方を説明する様子



「まちの人々の協力が増えるように」

4 鎌ヶ谷市安全対策課に聞く—市の防災政策と地域防災に向けた取り組み

ゼミナールでは住民の方だけでなく、市の防災政策を計画して実施する鎌ヶ谷市安全対策課に従事する職員の方にも協力を仰ぎ、「防災・減災に向けたまちづくりと地域防災」についてお話を伺いました。(日時：2022年8月2日、場所：鎌ヶ谷市庁舎内)。本特集記事では、「減災に向け、誰一人取りこぼさない防災政策を実現するために」をテーマに聞き取りしたことをご紹介したいと思います。

市民の横のつながりづくりを支援し、いざという時の危機に備える

鎌ヶ谷市は「ゆれにくい街」と紹介されていますので災害時の問題は少ないように思えますが、水害等の問題は考えられますので、市は未然に災害を防ぐような取り組みに積極的であることを読み取ることができました。様々なニーズを吸い上げることができ、啓発の機会があれば充実させていきたいという市職員の対応を確認することもできました。鎌ヶ谷市では市民が「自主防災組織」として届出申請を行えば、各地域に防災組織を登録することができます。また、自主防災組織が主体で「連絡協議会」を組織しており、災害に向けた横のつながりを図るだけでなく、市民（中間支援組織：本雑誌を編集する鎌ヶ谷 マネジメントラボ）と一緒に作成した「くらしの防災ハンドブック」も参考に被災時の対応方法や必要な対策を検討しているとのことでした。これは、災害問題を日常から市民の方々と一緒に考える機会を創ろうとし、市民目線の減災を目指して取り組む事例だと考えられます。



積極的に質問をしている様子

市民主体で行う自主防災訓練

自主防災訓練に市が自主防災組織、消防署等の関係各所と共催する場合には、「マンネリ化させない」、「地域の事情に応じて」柔軟に取り組んでいることのことです。市としては、各自主防災組織と各自治会が企画する自主防災訓練に出張し、訓練の内容調整や要望に基づき参加する場合もあるようですが、その内容は事情に応じた工夫を心がけているとのことでした。安全対策課としては、自主防災会や自治会から申請後、訓練の内容の調整をさせていただくそうです。例えば荷物の搬送訓練が想定された場合、「高齢の方が多地域では、場合によっては、「自分たちで運べない」という事情も考えられるため、安全の確保が難しそうな場合は別の訓練内容、例えば「AED使用法の訓練にしてみませんか」などのちょっとしたアドバイスをさせていただいています」という対応もあるそうです。また、年齢層の違いにも配慮しています。「例えば、新鎌ヶ谷は新しい住民が増えて年齢層は若い方が多いですが、北部地区は昔から住んでいらっしゃる方が多いので平均年齢が上がります。そうすると取り組み方に若干違



地域のニーズに応じた対応を学ぶ様子

いがあるので、考慮します」とし、「地域性を踏まえて、要望に合った内容」を考えるようにしているそうです。

注意を払いたい、防災・減災に向けた私たちの自助・共助とは？

「ニュースやネット情報何でもいいので、防災に対して興味を持ってもらいたいです」と答える様子が、筆者はとても強く印象に残っています。非常時には、「自助7割・共助2割・公助1割」と言われており、自助の底上げのためのきっかけづくりが大切な第一歩であると思いました。

また、「台風が起きた時には避難放送が聞こえない」という問題に対応しようと、「かがや安心eメール」を導入し、防災情報を発信しています。このサービスは、鎌ヶ谷市の防災防犯情報や子どもの安全情報等を、あらかじめ登録された携帯電話やパソコンへ電子メールで提供するサービスです。また、災害時における市民への情報伝達手段として「防災行政無線」がありますが、この防災行政無線の放送と同様の内容を電話により無料で確認することができる「防災テレホンサービス」があります。この回線が足りないという市民からの声をキャッチし、増設を行ったとのこと、今後もこのように市民をつないで情報をキャッチするための機会を広げていく取り組みが重要であると考えます。



住民の取り組み紹介の様子



集合写真

[かがや安心eメール／鎌ヶ谷市ホームページ](#)



[防災行政無線について／鎌ヶ谷市ホームページ](#)



[防災関連ハンドブック／鎌ヶ谷市ホームページ](#)



『くらしの防災ハンドブック』

5 少年消防クラブの研修を見学 —防災クイズ

2022年7月9日(土)、9:00～12:00(於:鎌ヶ谷市消防本部)、市内に住む小学生を育てるご家庭(ママ3名・パパ1名。少年消防クラブ理事)を対象とし、お話を伺うことにしました。なお、今回は鎌ヶ谷市少年消防クラブの「研修」に参加するご家族を対象に致しました。

聞き取りは「身近な防災対策の取り組み状況」、「災害時の集合場所の確認状況」に対して行いました。本記事は、その内容を踏まえて、とりわけ重要であった知見をもとにした「クイズ」を本文中に加えております。防災の大切さや知っておいて欲しい事などを認識してもらおうという目的で製作しておりますので、お考えください!

【Q1】火災警報器について

火災警報器の設置は義務付けられている

○か×か、みんな正解できるかな?



【Q2】消火器について

消火器の耐用年数(効果が持つ年数のこと)は10年である

自分の家の“火災警報器”は義務だけど、“消火器”は任意で、非常時に無いと困ることってありましたか?

改正消防法によって、2006年から全ての新築住宅に火災住宅用防災機器(本記事では分かりやすく、“火災警報器”と表記する)の設置が義務付けられ、「寝室」と「寝室がある階の階段」に設置されないといけないことをご存知でしょうか。加えて、2011年以降となっては全市町村の既存住宅(中古住宅)でも必要とされています。

しかし、重要なのは消火器の設置義務が無いことをご存知でしたでしょうか。住宅の防火には何よりも重要であるけれども、「消火器の設置」は“任意”

で、いざという時の皆さんの備えが不可欠です。また、消火器の設置には気をつけるべき点がいくつかあります。それは耐用年数—(1)購入してから一度も使用していなくても、その年数経過後処分する必要がありますし、(2)耐用年数は8年しかもたず、(3)処分に際した「リサイクルシール」が表示されている場合には、「購入した店舗に費用なしで処理してもらうことが可能」です。一度、見てご確認ください。無い方はぜひ、ご準備ください。

鎌ヶ谷市の防災ミニ知識

学校での対策

鎌ヶ谷市のある小学校では、災害に対する防災の取り組みが行われています。例えば、通学途中に災害が発生した場合、“通学路の半分”の手前であれば「自宅に戻る」と、それを超えていれば(学校付近)、「学校に避難する」という決まりがあります。



子どもと一緒に考える地域防災

少年消防クラブ

防火・防災思想の普及を図ることを目的とし、主に小学生3年～6年生の少年少女で構成され、防火・防災の知識を身につけるために研修活動を行っています。実践的な消火器や消火栓の使い方訓練や、ロープワーク、救急救命の研修などの他、防火パトロールや各種防災イベントなどで防火・防災について呼びかけています。

今回研修を見学させていただきましたが、消防クラブに参加することで、防災に対する意識が高まり、子どもたちも自助と共助を学ぶよききっかけにもなっていると感じました。「ホースを使った実演の消火訓練」を実施しているため、消防クラブに入ると実践的な活動といざという時の対応方法を学ぶことができる良い機会だと思います。



訓練の様子



扱い方の説明



放水訓練の準備

〈クイズの正解〉Q1.○ Q2.× 〈解説〉耐用年数はPL法で8年と決まっています。(東京都大島町公式サイトを参照)

自治会からの視点

6月19日(日)、14:00～15:30(於:二区連合自治会館会議室)、「防災意識と自治会活動」に関する調査を戸川ゼミナールで実施(以下同様)しました。今回お邪魔したのは鎌ヶ谷第二区連合自治会で、連合自治会長の高野氏をはじめ、田島氏、船木氏、藤田氏、石橋氏、門馬氏にお話を伺い、戸川ゼミナールは班リーダーの山口はじめ、米谷、星、豊島、西郡の計5名が参加しました。自治会をはじめとする方々の意見や考えを中心にご紹介したいと思います。



家族での共有

「人から伝達される情報が、災害を知る手段として安心」いざという時に人は、人を頼りにし、声を聴いて安心を得られるようです。しかし、災害発生時において、必ずしも他人を頼りにしているだけでは、災害現場に置かれた人々の安心が得られるわけではありません。それは、自ら動いてこそ、未然に危機に遭遇するリスクを減らせるのではないのでしょうか。

そこで、減災には、自分で情報と備品を確保できるようにすることが欠かせません。もし頼るとするならば、人々に対する有効的な働きかけの手段として、子育て世帯においては、学校にいる子どもから災害情報を得ること、その情報共有が安全に必要な情報を得られるつながりであることがわかりました。実際に、「お孫さんが何かやってきたんだよって伝えられたら、ちょっとは関心を持ってみようかなとなるかもしれない」ということでした。ぜひ、家族での災害情報の共有を対策の一つとして、考えてみてはいかがでしょうか。

いざという時の不安を軽減するために、リアリティーある準備の仕方を一寝室には「懐中電灯」と「笛」のご用意を

「準備しろって、言ってもリアリティーがないとね。」という高野氏。戸川氏は「東日本大震災の経験が大きくて、きちんと用意するようになった。」と説明されており、2011年に起きた東日本大震災の危機が、人を強くさせたという考え方もできるかもしれません。

また、「特殊なことと言うと、トイレに懐中電灯と笛は用意していますね。(中略)、各部屋にも用意してい

ますね。実際停電になったとしても、夜光シートを貼っておくと光って見える。」という田島氏。会場では、「ここまで準備している方はいない」という声が上がりました。このように「何をいつどこで」というタイミングと用意する物の情報を集め、日常から準備しておく必要があります。そのために、安全を確認する癖をつけるなど、一人ひとりの意識づけが、“人助け”につながり、それは“まち助け”にも広がる災害対応になるのではないのでしょうか。

イメージはできてるか?—災害が起きたら何が大変??

実際に災害が起きたことのイメージを日常からできているのでしょうか。それについて、筆者は不安を感じました。

例えば、「防災無線が有益に機能しているかが怪しい」、「防災無線は聞きづらいですね。うちのほうに船橋の無線が入っちゃって。これだと避難誘導の無線が両方聞こえてしまうことがあるかもしれない。」という高野氏。鎌ヶ谷市では電話を使用し、無料で避難内容を聞くことができますが、それを知らない人が多い可能性があります。いざという時に、今あるしくみがうまく機能するように、どのように情報を市民に共有すると、想定されるように市民が行動することができるのか。それを行政がきちんと踏まえた上で、対応策を検討していく必要があると考えます。

主婦目線で捉える、鎌ヶ谷市の防災、地震大国日本で家族で備える

6月26日(日)、13:30～15:30(於:中央公民館集会所)に「主婦・子供目線の防災対応」を考えるために、小学生ママ4名および子ども数名(親子4組)を対象にお話を伺いました。調査実施者は、戸川ゼミナールのママ・子供班B(班リーダーの藤田はじめ、宇野、石川、小畑、牧田の計5名)になります。主に、「防災訓練の参加経験者が主婦の方は0人であった」のに対し、「子供たちは学校で防災訓練があるため、防災に関する知識が豊富である」という重要な知見が得られました。この特集では、その内容を中心に紹介します。

東日本大震災を知らない今の子どもたち“学校での防災訓練”

今回協力してくれた子供達は、幼稚園年中から小学6年生までの子供達でした。子供達は、東日本大震災を体験していないのに起きた日にちをすぐに答え、「おはしも」といった避難時に必要な言葉の意味を理解していました。子供から防災訓練を大人達が教わることが大切になるでしょう。



もっと水を飲むべきだとは知らなかった?—知ってほしい子供向けの情報とリアルな教育を

「一人あたりの一日に必要な飲む水はペットボトル一本である。〇か×か。」と聞いたら子供たちが〇と答え、その理由は「水の飲み過ぎは良くないから」と答えており、答えは「3本」であるから不正解ではあったものの、防災に向けたきちんとした情報を学ぶ機会の重要性を感じました。また、子供たちなりの視点で減災・防災に対してよく考えている姿を学ぶことができたので、改めて教育の中で、防災意識を喚起させる取り組みが必要になると考えます。

防災対策に向けた母親の疑問と不安、情報の伝え方の問題でもあるか

「防災訓練への参加状況」を尋ねたところ、全員が

「参加したことがない」という回答でした。それは、「訓練についての情報が(身近に)来ない」という理由のほか、「情報が来ても訓練の名前以外の情報が無いため、どんな訓練(を実施するのか)について分からないから参加しない」とのことでした(「」内の括弧は調査者が速記録の文脈を踏まえて加筆。以下同様)。防災訓練の取り組み内容と効果の周知の方法に検討が必要です。

“市のあるべき防災政策”が実現しえるように

さらに、「現在行っている身近な防災対策」について尋ねたところ、「ほとんどの人が対策していない」という状況のようでした。一方で、対策をしている人も確認されますが、「水の量は三ケースほど、1～2週間持つと考えて」おり、「実際には数日間しか持たない」という情報を知ると大変に驚いていました。また、対策をしている家庭では、「寝ている環境(寝室)については、倒れるものが周囲に無いようにする。物が倒れないように、突っ張り棒などを工夫する」という対策を各々取り組んでいることが確認されました。

加えて、「災害が起こった際は市が飲み水や非常食を用意してくれている」と考えている方が多いようですが、「実際は井戸水を入れる袋が配布され、自分自身で井戸水を汲まなければならない状況が想定される」ことを伝えると、「皆さん初めて聞いたような反応」をしていました。これは本雑誌の読者の方にも共通するかもしれません。ぜひ、「市からの情報」を自分からも聞こうとする工夫が大事になるでしょう。

プレイベント

2022年を明けた2023年の1月早々に、吉羽ゼミナールが協力して製作した「みんなをまもるかるた〜話してつながる 地域防災」のプロトタイプを使用して、プレイベントを行いました。

この防災かるたは、普段は“タニンゴト”のように考える“防災”を“ジブンゴト”として考えられるよう、そして本防災かるたをきっかけとして、“暮らしが長い住民の方”と“比較的新しく越してきた住民の方”の交流や、“普段から地域活動を知らない人”や“地域活動に積極的な方”の交流を深めるきっかけになれば良いと思い、戸川ゼミナールをはじめ、吉羽ゼミナールに製作協力を得ながら作成したものになります。

実は、プレイベント当日にプロトタイプを見るのは初見でしたので、学生をはじめ参加した親御さんやかまらば担当者にとっては、「どのように活用したらよいのだろう」ということからスタートしましたが、始めてみると、あっという間の1時間が過ぎ、「さらにどのように修正を加えると、まちの人々にとって納得してもらえようかなかるたにできるか」を話し合う、とても良い機会になりました。

色々な遊び方ができますので、ぜひかるたを手にとっていただいて、色々な話や、実際起きた時のために備える必要な取り組みを、“遊びながら考えて頂く”と、充実した防災対策の一つに結びつくのではないのでしょうか。



参加した親御さんの感想

「以前のヒアリングに参加しておりましたが、このように今まで話していたことが、形になっているのはすごいと思いました。

学生さんもまた鎌ケ谷にきて状況が想像できるような話をするきっかけづくりにもなり、面白かったです。」

「大人がみている視点とは違う視点で子どもが考えていることが色々ありました。このかるたを通して、それぞれの人々の視点から深ぼりできるかるたになる、良いかるたになりました。」



戸川ゼミ編集後記

【ゼミ長・副ゼミ長】

宇野：今回の調査で、学んだ防災の知識や住民の声をこれからの自分の将来に活かしていきたいです。

山口：ヒアリングをもとに文章としてまとめ、防災について理解を深めることができました。

米谷：ヒアリング調査を経て、実際の市民の声を体験することができとても良い経験となりました。

【ゼミ生】

小平：防災に関して自分も知ることが出来た良い経験になりました。

牧田：今回の調査で、自分たちと子供たちの防災への認識が違うことに気付きました。

菅野：今回作成を通じて、防災対策に関してヒアリングの際に学ばせていただくことも多く、良い経験になりました。

星：防災カルタ制作を通じて地域住民の声を直接聞き貴重な経験をすることができました。

石川：ヒアリングを通して、鎌ケ谷市の防災について様々な目線から知ることができ、良い経験になりました。

宮下：今回の調査で多くの方々に協力いただいたので、この経験を今後の糧にしたいと思います。

麻生：今回の調査で、防災知識だけでなく鎌ケ谷市のことについても知ることができてよかったです。

豊島：初めてのヒアリング調査は、学ぶことが多く良い経験になりました。

平野：地域と自治体の連携がいかに大事かを知ることができた取り組みでした。

小畑：住民の声を直接聞く機会というのはなかなかないと思うので大変良い経験となりました。

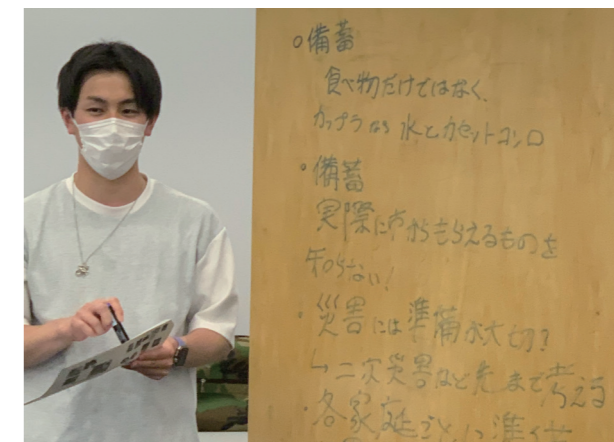
柳澤：大変貴重な体験ができました。これからの消防に活かしたいと思います。

【自由ゼミ履修者】

藤田：主婦層への調査で「防災」に関して自分達とはまた違った視点で見ることが出来ました。

西郡：今回のヒアリング調査を通して、防災に関する知識や地域住民の活動の様子を実際に聞くことができ、貴重な経験となりました。

なお、西郡氏、および藤田氏は淵元ゼミナール学生であるが、本活動は自由ゼミ（戸川ゼミナール）の履修生として、本研究では戸川ゼミナール（2期）と表記している。



吉羽ゼミ編集後記

齋藤：私のはかるた全体のデザインを担当させていただきました。具体的にはタイトルやカードのデザイン、イラストの構図の提案です。戸川ゼミのみなさんが考えられた内容をわかりやすく、楽しめるデザインを考えるのは大変でしたが、楽しい作業でした。
金丸：齋藤さんが考えてくれたイラストの構図を元にイラストを描かせてもらいました。私が猫好きなので猫を描き足したり、自分の髪色と同じ人を描きましたが、そのまま採用されたことが嬉しかったです。分類のマークは先生たちをイメージしています。

“かまらぼ”は、各種防災講座も承ります。防災士が2名メンバーにいます。

自治会の防災訓練や研修会、女性視点・ママ向け・子供向け防災講座、防災イベント・防災クッキング・防災マンと楽しく学ぼう など、ニーズに合わせて企画も致します。お気軽にお問合せください



防災クッキング



子ども向け講座



市民向け講座



自治会防災訓練にて

千葉商科大学の2つのゼミナールと共同制作

「みんなをまもるぼうさいかるた」～話してつながる地域防災～

大人も子どもも、楽しく学べる防災知識！

(ふつうのかるたではありません)

なぜかるたを作ろうと思ったか

自治会さんと防災講座のお打ち合わせをする時、必ずでてくるキーワードがあります。それは「住民同士もっとコミュニケーションをとりたい」「防災訓練にもっと参加してほしい」です。

防災訓練自体、いざという時に助け合える機能をもつためとても大切な訓練ですが、実は訓練に参加することで、普段顔を合わせないような人たちが一緒に行動をする、久しぶりに近況を話し合う等、特別にふれあうことのできる行事でもあります。年に1回の訓練だけではなく、コミュニケーションを取りながら防災についても考える機会をつくる

にはどうすれば良いのだろうと考えた末にたどりついたのが「かるた」でした。

本誌の記事にもありますが、このかるたは調査研究が得意な学生さんとデザインが得意な学生さんたちが、それぞれの能力を合わせて完成しました。読み札の内容は、鎌ケ谷市の自治会の方、親子、消防の方にお話を伺い、それを元に説明文も添えて作りました。かるた遊びをするたびに、防災に関する知識と興味がアップしていくこと間違いなしです！

防災講座やイベント・かるたについてのお問合せは kamalabo.info@gmail.com 鎌ケ谷マネジメントラボ 甲斐まで。



かまらぼ編集後記——

この3年間は市民活動や地域活動がコロナの影響でかなり制約を受けてしまいました。住んでいる地域でのお付き合いや回覧板のやりとりまで影響をうけてしまい、こんな時に他の災害が起きたらどう行動をとればいいのかという素朴な疑問から今回のテーマが決まりました。

備蓄リストや防災マニュアル的なものではなく、同じ市に住んでいる人たちの防災についての考えや意識を記事にして、共感したり考えるきっかけになれるような冊子にしたいと思いました。快く取材させてくださり、貴重なご意見を下さった皆様、ありがとうございました。また、全体の調整を華麗に捌いて下さった野際さん、調査分析について研究している戸川ゼミナールと優秀なクリエイター揃いの吉羽ゼミナールの皆様のご協力でカタチにすることができました。ありがとうございました。

(かまらぼ一同)

鎌ケ谷市 市民活動紹介冊子

Gaya - がや - Vol.5

発行：2023年3月

発行元：一般社団法人 鎌ケ谷マネジメントラボ

この冊子についてのお問合せ、活動についてのご相談は、

一般社団法人 鎌ケ谷マネジメントラボ

kamalabo.info@gmail.com

080-4200-4780

までお願いします。

記事を読み、団体のことをもっと知りたいと感じたら…鎌ケ谷市市民活動推進センターのホームページに「団体一覧」が掲載されています。そちらもご覧ください。

鎌ケ谷市市民活動推進センター

<http://www.collabo-kamagaya.jp/>

中間支援

一般社団法人

鎌ケ谷マネジメントラボ (略称: かまらぼ)

かまらぼ

NPO・市民活動団体への中間支援を通して

「自分らしく関われる居場所」を世の中に増やす活動を行っています。

わくわくする
居場所もってる？

【団体の取り組み】

- NPO・市民活動団体の支援・団体間交流の促進：連携のための出会いの機会・意見交換や交流の場づくりの実施
- 団体運営の支援：事業構築のサポート・相談などの伴走支援・オンラインツール等の導入支援
- 地域デビューの支援：ボランティアマッチングの相談・団体立ち上げの相談・伴走支援
- 市内の市民活動に関する情報発信：市民活動紹介冊子・チラシの作成・イベント出展など
- 各種講座・ワークショップなどの企画・実施：講師の手配も致しますのでご相談ください。

【まずは「あなた」のお話を聞かせてください！】

- ・新しいことを始めたいけど、結局いつも通り…
 - ・会員が思うように集まらない。何かアイデアはないかなあ
 - ・一人で団体のことを抱え込みがちで、ちょっと話がしたい
 - ・子育て中だけど、何か地域のつながりをつくりたい！
 - ・仕事で土日しか地元に居ないけど、地域と関わりたい
 - ・団体（サークル）を作りたい。何から手を付ければいいのか？
- などなど、お気軽にお声かけください！

一般社団法人
鎌ヶ谷マネジメントラボ

かがまらぼ

Since
2016



わくわくする居場所
もってる？

地域活動に関すること、講座、
交流会など
お気軽にご連絡ください。

kamalabo.info@gmail.com
<https://kamalabo.wordpress.com>



裏表紙デザイン：千葉商科大学 政策情報学部 齋藤仁菜